

## 第九編 愛国者たちの群れ

(ジャラモギ オギンガ オデインガの英雄的生涯 そのⅡ)

10月の暦を見れば、モイデイ（10月10日）とか、ケニアッタデイ（10月20日）があり、ケニア独立の英雄たちの名を冠した国民休日が続く。

ケニアッタデイは、1952年10月20日に植民地政府によって、戒厳令が発令され、ジョモ ケニアッタをはじめとするKAU（ケニア＝アフリカ人同盟）の幹部たち約200名が一斉検挙された日を記念しているとの事。ケニアッタは、都会に居を置きながら、当時森に隠れてゲリラ活動を展開していた多くのマウマウ団の戦士達（the Freedom Fighters）の影の指導者と見なされていた。

彼は、1961年8月に解放されるまでの約9年間を牢獄で過ごした。

### (3) アフリカ人8議員団の戦い

1956年に、植民地政府はウォルター卿を首班とする委員会を任命し、植民地内のアフリカ人に選挙権を付与するための検討を委ねた。その結果、アフリカ人が直接に代表者を立法府へ選出できることになった。8つの選挙区が作られ、1957年には選挙で選ばれた最初のアフリカ人達が立法府に席を確保した。つまりナイロビのトム ムボヤ（後に暗殺された）、東ケニアのムイヌ、海岸のエンガラ、ニャンザ中央のオデインガ、ニャンザ北部のムリロ、ニャンザ南部のオグダ、中央州のメイト、リフトバレイのモイ（後に第二代大統領となった）であった。

1957年の選挙では、ニャンザ中央で猛烈な舌戦が展開された。実質的な2大候補激突だった。ひとは、ブレイ アポロ オハンガで、1953年以来既にニャンザの指名議員であり、1954年以来植民地政府の閣僚として通信開発とアフリカ人対応大臣であった。それに対して、オデインガは、オハンガの好対照であったし、植民地政府に対する妥協のない批判者であった。彼ら2人の他にも地方の政治家とみなされていた所謂「当て馬」には、オニユロ（組合指導者）、オランガ（農本主義者でアフリカ地方議会議員。彼の息子アカチは、後にオデインガの娘ウエンワと結婚する）、オダバなどが舌戦に加わった。興奮の日々であった。

オデインガはアルグウィングス コドヘック、タイタ トウエット、ジョレ タメノと同盟し「A-K プラン」を発表した。彼らは「公務員は、アフリカ人で」、「アフリカ人に、普通参政権を」、「アフリカ人に関することは、アフリカ人の手で」、「アフリカ経済と社会の発展は、特別自助計画を持って援助すべし」、「アフリカ人の子弟には、義務教育を」、「東

アフリカは3カ国夫々で、アフリカ人が責任を持つ体制になる場合を除き、連邦を組まないこと、「人民の政府によって、保健福祉、現地の人々に奉仕するのを原則とする移民制度、言論、出版、集会の自由を含む全ての正義を」等を掲げた。これらの要求は当時のアフリカ人の急進派を代表していた。国民的な政党が、まだ存在していなかったため、実際の政治は選挙区レベルで行なわれた。ニャンザ中央では、争点は一つであった。つまり、ウオルターオデデ（1946年に最初に立法府に指名されたルオー族の議員で、ケニアアタが1952年に逮捕されてからはKAU（the Kenya African Union）の活動的な委員長でもあった。オデデはマウマウ運動にルオーを引きずり込もうとしているという理由で拘留されていた。）との関係で各候補の位置はどうなのかという点であった。この点は特にオハンガとの争点でもあった。オハンガは、オデデの後任に指名されていたし、1954年には大臣にもなっていた。ルオー族の大衆の目には、オハンガは、オデデのような、いわば、植民地の圧制の犠牲者であり殉教者の単なる世話役としてしか写らなかった。オハンガは、また、その指名議員の席を、彼自身の当然の権利であるかのように振舞っていた。オハンガは、集会で他の候補者とぶつかる時など、彼の大臣としての権限を強調した。彼の競争相手は、そのことだけでも身を翻した。オハンガは、キスムに来た時など、酒場で自分のビジネスにばかり夢中だという噂があった。一方、対抗馬であるオデインガは、休憩のときにも、主として地方問題に取り組んだ。彼は、ルオー組合をもち、LUTATCOを持っていた。オデインガは、「小農民と同じ声をもっている」と評判される事に強い誇りを感じていた。

オデインガは、自分が持っている新聞を、十分に使った。5,000部のラモギ誌やニャンザタイムズであった。市場（マーケット）が立つ時、彼はどの市場にも必ず顔を出した。そして「聞いてくれ、諸君！」と語りかけた。ルオー族の若者たちが彼を支持した。特にジェム支族のアデロオナニやアレゴ支族のオチエンゴオウエレ等のギター引きがキャンペーンに加わった。オハンガは、引き摺り下ろされるべき対象であったし、ギタリストたちは、そんな大衆の気分を最も良く代表していた。その歌には「オハンガが、いつか飛行機を買うのが僕には見える！」という棘のある詩が含まれていた。無論、オハンガは飛行機を買わなかったが、1957年3月の選挙の結果は、オデインガの9316票に対し、オハンガは3360票にすぎず、残りの候補者は問題にならなかった。オデインガにとって大事なことは、老いも若きも、彼を支持したということだった。同時に、政治学的興味でいうと、このときにキャンペーンの先頭を切ったのは、オデインガと同年齢層の者たちや彼の友人たちであったということで、彼らは、歌を歌い、ジョークを飛ばし、オデインガのために強い支持を表明した。キスム市営市場からは、オムヤチケニアやママアボゲが登場し、アレゴカルロスからはイダジュウエンジが登場した。後になって、人々は、彼女たちを「ママウフル」（自由と独立の母）と呼ぶことになる。植民地主義の数々の反撃に直面しながらも示した彼女たちの「勇気」は、長く人々の記憶に残り、

『自由と独立の母』と呼ばせたのだろう。

後日談だが、1984年のマリー オデインガの葬式では、オムヤは一週間の間ウフルソング（自由と独立の歌）を歌い続け、自由の為の戦いの時代を思い起こさせたし、1988年のイダの葬式では、これらの自由の為に戦ってきたが今は政府に忘れ去られた女性たちが再度集合したという。そして、そのときのKANU（ケニア＝アフリカ人民族同盟）の全国組織の会長で文部大臣であったピーター アリンゴに、詩文をもって強く訴えた。1993年のママ アボゲの葬式は、事実上ルオー族の民族葬であった。彼女と同世代の女性たちは、マリー オデインガの葬儀を再現させた。ケニアを独立に導いた国民的な高揚の時代を代表する女性陣が、1957年のオデインガの選挙を機に登場し、それを勝利に導き、その後の『ケニアの独立』に向かっての大きな力の一つとなっていた。

新たに選出された8人の議員たち（すなわちニャンザ中央のオデインガ、ナイロビのトム ムボヤ、中央州のメイト、ニャンザ北部のムリロ、東ケニアのムイヌ、リフトバレーのモイ、海岸のエンガラ、ニャンザ南部のオグダ）は、議院内活動を全て自己流で展開しなければならなかったが、彼らは、植民地政府にとって、侮り難く、かつ、その団結は1963年の独立（Uhuru Day）まで続くことになる。最初に「選挙権」の問題があった。立法府の議員は選挙資格条件に基づいて選出されるが、その条件とは「財産と政治的な忠誠心」が決め手であった。大部分のアフリカの民には、投票権は与えられなかったのである。だから8人の議員の運動の第一課題は、「全てのアフリカ人（成人）に選挙権を与えること」であった。この件は第二の課題である、所謂「アフリカ人多数派の原理」の問題でもあった。1950年代では、アフリカ人居住者たちにとって、これは「真昼の夢」に過ぎなかった。ナイロビやロンドンの植民地政府は、しばしば、真剣に「ケニア人がこの政治的なレベルに達するには21世紀まで待たねばならないだろう」と考えていたくらいであった。「2041年」がしばしば意味もなく論じられたりした。支配者たちの論理は、「アフリカ人たちが自らを統治できるように、支配者である自分たちが教えなければならない」ということだった。

オデインガが演説し、その後、同僚たちも叫んだことは、「アフリカの尊厳を取り戻せ！」ということだった。一つのモデルとして、エンクルマのガーナがあった。実際ガーナは、重要な目標となり、モデルであった。すなわち、第三の課題は、「ウフル ササ（Uhuru Sasa!）＝即時独立」であった。オデインガ自身の「即時独立」の考えは、「自由」と「ジョモ ケニアッタの指導力」の二つに、密接に結びついていた。オデインガのこの個人的なコミットメントこそが、ジョモ ケニアッタの政治的復権をめざして、オデインガを（イギリス人が動く3年も前から）動かし続けた原動力だった。オデインガは、『全てのケニアのアフリカ人の真の指導者、ケニアッタ』と『独立』という二つの課題を合体し、「独立は

ケニアアッタで！」(Uhuru na Kenyatta)を立法府の第四の課題とすることを強く主張した。

第五の課題は、これら全てを実現する為の環境であり、政治的な組織を打ち立てる事であった。当時、植民地政府は、無論、国民的規模の政治結社を禁止していた。したがって立法府の議員たちは、「国民政党的樹立」を呼びかけることにした。その序曲として直ちに立法府の中に党幹部会を組織し、「アフリカ人議員総会」と命名し、隠れ蓑とした。オディングは会長に選出された。

立法府の中での彼らの存在は、ある意味で憲法の変遷の賜物であり、ケニア人の政治力に新しい広がりを与えることになった。つまり「立憲政治」という事である。表面上、彼らは、彼らの政治課題への熱望を生み出している憲法の遵守を喧しく要求した。しかし、国とイギリス人の凝り固まった利害から一字一句を邪魔された。

ポイントは単純であった。憲法の変遷は、彼らが討議を通じて政治状況に変化を齎すうえで、また政治課題に可能性を齎すうえで、重要だったのだ。憲法上の討論(ディベート)は、人々にケニア人の社会の色々な夢を見させてくれたし、彼らの熱意を表現させ、変わりにこれから生まれる国についての恐れすら引き出し、更に独立国家の将来の政治への関与や参加についての要求を引き出す結果となった。

彼らの展開する「立憲主義」運動は、民衆に、彼らの欲しいものは何か、国に期待することは何かを考えさせ、特別の権利を求めることで恐れを事前に解消させ、権利を確たる条項にたかめ、全てを包含する「権利の章典」の意味を明確に把握させた。それは、個々のコミュニティーが強く感じていた人種、民族意識、階級、財産、土地を持たないものたち、富などの難しい課題を前面に引き据えることにもなった。この時期の歴史が、しばしば「独立への立憲主義的階(きざはし)」と呼ばれる由縁であった。

全ての課題が、背伸びし過ぎる位の大きな課題であったが、8人の立法府の選出議員たちは、とにかくも、始めなければならなかった。「アフリカ人議員総会」が、唯一の道具だったし、それはオディングの指導力にかかっていた。彼らは直ちに試合開始(キックオフ)した。今度の方法は、とにかく「粘り強く主張すること」であった。彼らは、彼ら選ばれた根拠となっているリトレットン法を即時廃止し、立法府とロンドンでの憲法会議で、アフリカ人が多数派を構成するように要求した。彼らは廊下で支持者に向かって弁じ、更に広い世界に呼びかけた。彼らのテニスコートは、今や立法府の内であった。

中央ケニアで、オデインガに、永遠の脚光を浴びさせることになった出来事が、立法府でのほんのささやかなデイベートから始まった。1958年7月24日のことであった。トム・ムボヤが立法府でジョモ・ケニアッタ、ポウル・エンゲイ、クング・カルムバ、ビルダド・カギア、アチェング・オネコ達の取り扱いに関する質問を開始した。彼らは、その頃、ロッキタウングの囚人であった。「手紙が届かない」とか、「服が十分でない」とか、「金が不足している」とかの訴えが来ていたのだ。デイベートの中で、植民地政府は、これら囚人について「刑法」に照らして論じていた。このことは、いつもオデインガの琴線に触れ、オデインガは、ケニア＝アフリカ人の魂を呼び覚ますような議論を大胆に展開することになった。つまり「彼らは、われらケニア人の真の指導者である」と。立法府にあった開拓移民たちはうめき声をあげ、ワニユツ・ワウエル、ドクター・キアノ、バーナード・メイツ、ジェレミア・ニャガ等とのデイベートは3日間続き、彼らはオデインガやムボヤと意見を異にする事になった。彼ら4人は、中央ケニアの真の指導者は、自分たちであって、抑留中のケニアッタたちではないという宣言書を発表した。そこでオデインガは、「民衆こそ私の主張を聞くべきだ!」とし、議会の外でもキャンペーンを繰り広げた。ナイロビや中央ケニアの民衆は、直ちに、オデインガを「ケニアッタ解放運動のチャンピオン」として認めることになった。一夜にして、「独立はケニアッタで」(Uhuru na Kenyatta) がケニア人の政治的スローガンとなった。

この事件が突破口となって、植民地政府は、もはや、アフリカ人の声を無視できなくなり1961年8月の「ケニアッタの解放」へと道を譲ることになった。

#### (4) 当時の国際的な情勢について

ケニアの自由と独立のための戦いを語る上で重要なのは、国際的な尺度という側面、すなわち国際社会のある良心的な部分が、「1920年代以来、植民地主義がケニアのアフリカ人に何をしてきたのか」ということに関心があり、かつ、心配していたという事である。

1920年代と1930年代から、ノルマン・レイズとウィリアム・マッグレガー・ロスの2人の名前が銘記される。2人は英国のケニアでの公務員であったし、ジョモ・ケニアッタと組んで、イギリスでケニアの植民地勢力の力の乱用に反対して活動していた。

1930年代には、T. ラスマコンネンやC. R. L. ジェームスなどの黒人知識人が、ジョモ・ケニアッタから直接ケニアの話を知っていた。やはりケニアッタから、ジョージ・パドモアの反帝国主義同盟とモスクワのコミンテルンの話を聞いていた。

1940年代には、フェビアン協会の社会主義者たちが、イギリス国内で、反植民地主

義の運動を最高に盛り上げていた。その中心人物として、リタ・ヒンデンやフェナー・ブロックウェイがいた。彼らは、1950年代にはマウマウ団の運動があったために支持を中断して、植民地の残酷な施政者に反対してケニア人を守ろうとしていたアフリカ系アメリカ人（黒人）で世界的な舞台で活躍していた政治家ドクター・ラルフ・ブンチ、黒人学者マーチン・キルソン、黒人ジャーナリスト・ビル・ケイトン、弁護士タグード・マーシャルの活動に加わる形をとった。

その頃までに、オデインガは1950年代の国民的なレベルの舞台にのし上がっており、舞台はしつらえられていた。

当時「アフリカの民族主義的高揚」があり、クワメ・エンクルマ（ガーナの初代大統領でアフリカ社会主義を提唱し実践した人物）によってこの時代は代表されていた。その後、アフリカ史家は、この時代を「エンクルマの時代」と呼んでいる。

実際1945年から1966年にかけてのアフリカ史は、彼の「アフリカ民族主義」と「汎アフリカ主義」の二つの考え方によって彩られていた。エンクルマは、「アフリカの政治的独立が、時代の最も重要な課題である」と主張した。アフリカ大陸には、多くの民族がおり、多くの指導者が生まれてきていた。例えば、ケニアのムボヤ・ヤ・オデインガからニヤサランドのカマズ・バンダ、ベルギー領コンゴのパトリス・ルムンバ、南アのネルソン・マンデラといった具合であった。エンクルマは、「独立」を、「大衆を動員し、そのために働くに値する達成可能な目標」と位置付けた。エンクルマは、大衆政治を前面にたてて、大衆運動の指導者に自信をあたえた。ケニアのオデインガやコートジボワールのハウフオエト・ボイグニのような貧農の指導者だけでなく、ケニアのトム・ムボヤやギニアのセコウ・トウレのような都会の労働者の指導者にも広く接見を繰り広げた。もっとも大事なことは、エンクルマの「汎アフリカ主義」の考え方だった。「全てのアフリカ人は団結しなければならない」とする考え方は、「全アフリカ大陸の独立を達成する」考え方でもあった。1957年にガーナが独立するや、エンクルマは、「ガーナの独立は、アフリカ全土の独立なくしては意味がない」と宣言した。その時から、エンクルマは、アフリカの民族主義者達を探し出し、ガーナに彼らを招き入れた。エンクルマは彼らと話し込み、財政的にその党派を援助し、アルジェリアから南アに至るゲリラ運動の軍事訓練を施したのだ。

その初期の段階から、オデインガは、エンクルマの教え、勇気、そしてアフリカの独立にとってもっともしつと敵としての「帝国主義」についての認識に傾倒した。オデインガの言葉を借りれば、「私は一気にエンクルマの弟子になった」ということになる。これがどんなことを意味するか焦点を当ててみよう。

民衆の中でのエンクルマの「自信」は、オデインガのももとの「人民に忠誠を」という姿勢に、更に強固なものを付け加えた。エンクルマの、「帝国主義」に対する警戒心は、オデインガの中の同じ弦をはじいたので、オデインガは、ケニアの開拓移民たちの強さの由縁は、彼らがイギリスの帝国主義者によって、後押しされているからだという事実を容易に理解する事ができた。エンクルマの「精神的独立」という考え方は、オデインガ自身のケニアの開拓移民たちの操作から離れたという「気分と願い」を、更に堅固なものとした。そして遂に、オデインガのみならずジュリアス ニェレレ（タンザニアの初代大統領）やL. S. センゴールのようなアフリカの知識人たちも、エンクルマの追求するアフリカの発展のための「戦略」に、その時代の人たちは「アフリカ型社会主義」と呼んでいたが、深く、魅了されていった。

この「アフリカの真の独立」という目標は、その時代の「世界的力」と相克を生じた。資本主義と共産主義の相反するシステムの間で、あるいは西陣営と東陣営の間で、ジャーナリストの言葉として使われていた、所謂「冷戦」に巻き込まれる事になった。両陣営はアフリカを取り込もうとしてアフリカの指導者たちに独立を約束し、財政と物資の供給を惜しまなかった。エンクルマやエジプトのアブデル ナセルのような指導者たちは、社会主義の観点からソビエトの支持を受け入れたし、コートジボアールのボイグニやナイジェリアのタファウェ バレワなどは西側の支持を受け入れた。ケニアの中でも、オデインガはソビエトに支持され、中国や東独、ユーゴスラビアに支持され、アメリカやイギリスの支持をうけたトム ムボヤ、 ジュリアス ギコンヨ キアノ、エンジョロゲ ムンガイと対立した。この対立は、「民族主義者の運動」が「冷戦」によって犯されたことを意味していた。

これらの要素は、1958年以降のオデインガの経歴に直接響いていった。オデインガは死に物狂いでエンクルマやナセルとの一体性を求め、ユーゴスラビアのチトーや中国の毛沢東やソビエトのフルシチョフを訪問した。数百人のケニア人学生を、これらの国々へ留学させる約束を取り付けたりした。西側から、オデインガは「コミニスト」とみなされることになった。

（次号に続く）

オリジナル文献：

Makers of Kenya's History : "Jaramogi Oginga Odinga"

(by E.S. Atieno Odhiambo/ Series Editor: Prf. Simiyu Wandibba)

参考文献：世界現代史 1 4 アフリカ現代史 II 東アフリカ 吉田 昌夫 著